

夢だより 風だより

— 第五想 —

地域の活性化とは、どういうことだろうか。人・モノ・カネの行来が盛んになれば、おのずと地域はにぎやかになる。政治・経済の中心といわれた都市は人・モノ・カネの3点セットを呼び込み栄えてきた。交通網の整備も重要な要素であった。

しかし今や交通網の整備は国土の隅々にまで及び、それにともなつて政治経済の分散がはじまっている。

一方で歴史遺産や大自然は昔から人々を集めて来たし、今でも本県を代表する日光や那須には県外から多くの人々が訪れている。しかしそのことにも変化の兆しが見えてきたように思う。人々を呼び込む要素の多様化が確実に進行しているのだ。

宮崎県に綾あやという町がある。人口は7000人程で面積の8割が森林であり主たる産業はなく、かつては「夜逃げの町」といわれた町である。その町が今では年間120万人の入込数を誇るまでになった。さわだった観光資源があるわけではない。あるのは2000ヘクタールにおよぶ日本の照葉樹原生林とそれら原生林に育まれた日本名水百選の湧水、さらには、生ごみ、人間や家畜の糞尿等すべての有機物を土に還すという日本一の有機農業。そして、こうした町のありようを誇りに思い希望と喜びをもって実践する町民。綾とはそんな町である。

30年前、原生林を皆伐し当時は金になつた杉、桧などの黒木を植栽する動きがあつたそうである。しかし当時の町民は一時しのぎの経済的利益ではなく、町本来の特性を生かした持続可能な発展の道を選んだ。あの時目先の利益を選んでしまえば、湧水も日本一の有機農業も綾町の水に惚れこんだ雲海酒造の大醸造所もなく、今でも「夜逃げの町」であつたにちがいない。

人々は有名な歴史遺産でも華やかな文化でもなく、生きとし生けるものあたりまえ

の営為を大切に
する綾町の生き方・暮らし方を支持した。ただいるだけで心と身体が癒される町の空気に感動し、120万人もの人々が来町するに至つたのである。

何が幸いし、何が災いするのか。施策の動機は善であるか、理念は将来にわたつて通用するのか。町政をあくまでも責任の重さを、綾町は身震いするほどの感動と緊張をもって教えてくれている。



町長記